

GR  
白雲郷

とりお



27

昭和48年7月1日

宗教法人

鳥居観音

## 表紙 納経塔の説明

この納経塔は、今から二千年前、「アフガニスタン」や「パキスタン」地区に於て数百年の間仏教がいん盛を極めた「ガンダーラ」の遺跡から掘り出されて、博物館にあったのを原型として考案し、三蔵塔と大観音の中間の面白岩に建立したもので、総高十五米です。

内部台上には獅子を台座として、金箔の印度式釈迦如来の木彫を安置してあります。そして、十万巻の「般若心経」が納められる容積があります。是は大観音内の一万体観音を供養する為、先ず一万巻の「心経」の写経を皆様方をお願い中です。そして秋には（10月30日）その落慶式と納経式を挙行いたしたく念願しております。就ては何卒写経にご協力の程お願い致します。



とりゐ 第二十七号 7月1日発行

目次

裏表紙	鳥居観音案内図と諸行事のお知らせ	二二
鳥居観音だより	……………	二二
田舎医者	……………(其の七)……………見川鯛山	一八
西遊記	……………(其の二二)……………	一四
孝経	……………(其の一)……………小林高安	六
インドネシアの旅	……………(其の二)……………桐江	九
老万卷写経奉納者芳名(第二集)	寄進者芳名	
老万體観音奉納者芳名(第十三集)		
表紙	納経塔の写真・裏納経塔の説明	
導光禪師御法話	……………(其の十)……………	二



道光禪師  
（故高階瓊仙貌下）  
御法話

（其の十）

現身說法

古人の語に「一丈を説き得んより一尺を行なうに  
しからず、一尺を説き得んより一寸を行なうにしか  
ず。」としてありますが、これはすなわち現身說法  
の道理であります。言句の說法は常に申しますよう  
に、月をさすの指、門をたたくの瓦も同じであつ  
て、指の外に月を見、門をたたいて扉を開くのが目  
的ですから、目的を達すればそれでよい。したがつ  
て釈尊一代の說法も、言句につき廻わるのは目的で  
はないから、如来（仏）は金剛經に、  
「汝等比丘、わが說法は筏喩（ぶたう）の如きものと知れ」と  
申してあります。船や筏は彼岸に達するまでの道

具である。道具はやがて捨ててもよいものです。ゆ  
えに捨ててはならない真の說法は、すなわち現身説  
法です。それではその現身說法とはどんなことかと  
云いますと、深い意味から云えばむつかしい道理も  
ありますが、早い話が、お互いのこの身をもって、  
直ちに他に対して道徳的感化を与えることです。

彼の菩薩が三祇（さんぎ）（非常に長い時間の修行）と云う  
時間、身相の莊嚴を遊ばすと云うことです。利他の  
ためには、第一容貌が大切です。大智と大悲の力を  
もって、威嚴と柔和の妙相を具足遊ばすのです。それ  
で彼の観音さまや、地藏さまなどの御像を拝すと、  
なんとなく自分の心が柔和になって、しかもその中  
に凛（りん）としておかすことのできない一種の威嚴にふれ  
ます。常に自心のうちにこのような感觸に接すると  
きは、自然とそれが外貌に現われて、人から愛敬さ  
れるようになる。このような感化をわれわれに与え  
てくださるのが、いわゆる菩薩の現身說法です。

この現身說法と云うことは、仏や菩薩（悟りを求  
める人）だけではありません。今日、世間世間を教

える宗教家や教育者らは、もちろん、いやしくも多くの人の上に立ち、または一家を治める主人なり、主婦として、家族を円満にはぐくみ、同時に下女下男らを支配していかねばならぬ人達には大いにこれが大切です。

およそ説法と云うことは、昔の仏さまや、今日の坊さん達が、高いところでお話申すことばかりを云うのではありません。それらは前に云った言句の説法で、効能書を読むようなもので、真の説法と云うのは、主人には主人の法があり、主婦には主婦の法がある。又商人でも、官吏でもそのとおりの法があります。そればかりではない。犬にも、猫にも、草にも、木にも、有情無情おしなべて、みなそれぞれの法があるのです。その法をきちんと守って誤まらない、そこが、ことごとく姿の説法であります。

二宮尊徳翁の歌に、「声もなく、香もなく、常に天地は、無文の経をくりかえしつ」と、ありますのはこのことなのです。

それで靈雲れいうんという人は、桃の花を見て悟られました

た。香敵と云う人は竹に石のあたって響く音で悟られた。縁覚（師匠につかないで独りで悟りの世界に入る）の修行をする人は、飛花落葉を観て悟ると申してありますが、お釈迦様は明星の輝くを見て、大悟遊ばされたように、山河大地日月星辰、森羅万象ことごとく、従昼至夜（朝から晩まで）現身説法して、吾人に悟りを与えているのです。したがって一家の主人であり、主婦である人も、むやみに口やかましく小言をいうばかりが能ではありません。おのおのが、その分を守って、自然と家庭の美風を養い、出入りのものや、下下までも感化していく、身操行持の美徳を發揮するのが、長たる人の現身説法です。

ところが人のこの身は心の影法師ですから、その品性の高い低いはみな心、すなわち精神の美徳によるものですから、人は心の修養が第一であり、その修養の美徳が身に現われて他を感化するのであります。その心の修養としては、信仰が第一でしょう。

それによって、凡夫邪惡の根性が如来（仏）大悲の光明に照らされて、次第にわが本心の美徳を發揮

し、如来（仏）の光明と感応同交いたします。

このように感応同交するとき、万徳の仏身は常に私達の胸中におられて、頭上から脚下まで、このみ仏の支配によって動かされます。これを信仰の生活と云います。

この信仰の生活では少しの時間でも悉く現身説法であります。

信仰の生活を持ってない人は、心中暗闇です。故に百鬼横行してゐるのです。これを煩惱の魔といひます。天理にそむき、人道にたがい、ついに一身を破めつし、死しては地ごくの罰苦をうけるに到るのです

### 生きるということ、食べるということ

これは明けても暮れても離れることのできない問題です。およそ生きてゐるものは、いつまでも生きていたいと願うのが、本能です。もつとも自ら命をすてて行く者もあるが、それは何かの変つた事情にあるもので、普通ならば何としてでも、生きていたと云うのが当然です。鳥獸は勿論、昆虫でも、恐

怖というものをみなもっています。この恐怖の心理は、生の執着から命が惜しい、と云う心理の動きであると云います。

それほど執着してゐる生をたすけるものは、即ち食物です。それとともに、欠くことの出来ないものが、人間生活では衣と住ですから、丁度かなえの三つの足のうちに、どの一つを欠いてもならないものです。中でも第一の要求は食であります。

ひもじさと寒さと恋をくらべれば  
はずかしながらひもじさが先

と云う歌があります。

食物は、生存する上にそれ程必要なものですから仏教には、四食と云つて、四とおりの食が説いてあります。すなわち段食、だんじき 触食、しょくじき 思食、しじき 識食と云う四つです。食と云うのは、物の生命を資する力となるものを云うのですから、その意味においてこの四食が説いてあるのです。

第一の段食と云うことは、段は分段の意で、私達の肉体を資益する食物には、さまざまな分類があつ

て、千差万別、人間程食物の種類が多いものはない  
と思います。それを段食と云うのです。日本食は勿  
論、西洋料理、支那料理その他の料理があつて、そ  
れぞれ味覚をよろこばせるようになっていきます。そ  
れを段食と云います。

次に触食と云うのは触は対触といつて、主観が  
客観に対して段食をとることを忘れていても、空腹  
を感せず、平気である時は、触感の力で生命を支え  
ていると云います。たとえば、芝居や映画や、その  
他おもしろいものに見入ったり、きいたり、または  
反対に、苦しいことや、悲しいことがらに出あつた  
とき、ご飯を食べずについても、氣力を持っていると  
外界への対触がその人の食となつてゐるわけです。  
次に思食といひますのは、意思の力のことです、  
なにかものごとを思ひこむ、考えこむというような  
場合、これまたご飯を食べずについても、平気でいら  
れるようなことは、その思考することが氣力をささ  
えているからでありますから、それを思食というの  
です。

最後に識食といひますのは、認識するとか、意識  
するとかいう、心識作用の根本を仏教学的に第八識  
といひますが、これが人の寿命をささえているとい  
うことです。

前にのべた三食というものがあつても、この識が  
なければ生存することが出来ないと言つて置きます。  
故にこの識に人を活かしている力があると云うこと  
でそれを識食というのです。

しかし以上の四食は、要するに、肉体生活を資持  
するものであります。人には、さらに精神生活があ  
りまして、その精神生活を資持する食力となるのは  
なんでしようか？。

これにもいろいろありますが、もつとも滋食と  
なるものは宗教であります。宗教なるものは、そも  
そも人の精神を救ひ、そして力づける役目のものだ  
からであります。もつとも宗教をもたない人でも、  
精神は生きておりますが、そんな人は精神の榮養不  
良者なのであります。

# 父母の恩

(其の一)

小林 高安

## 孝道について

てしかり、他に対する惨忍性は交通地獄をはじめ企業公害として人命を怯やかし続けております。物的文明を誇る反面に修羅地獄の暗黒社会に向つて直行しつつかある実態はまさに人類の滅亡に繋がる重大事であると云うも過言ではありません。

私共の生活は、精神面と物質面の調和を保持して生きることが理想であり、それが本来の姿であると考えますが、近頃の物的偏重の傾向に災いされて、その欠点が顕著に現れた結果が親子断絶とか、交通地獄であります。元来親と子の関係は切ることのできない生命の連鎖によって幾千万年の昔からの結果としての尊い命であります。それが今日核家族時代となれば親子断絶現象が当然の如く論ぜられるその原因は、精神的に生活思考力の貧困化であり、物欲に振り廻されて正邪善悪の判断力を失い。絶えず禍を犯して悪を悪と思わず。又は悪を承知で行動し自ら不幸を作り出す現実が表面化し、親が子を、子が親を殺害する悲惨極まる事実があり、骨肉関係に於

私共はこの現実を直視して今こそ決意新たに、人類相互の英智を發揮し問題解決に邁進しなければなりません。よって愚僧も菲才浅学を省みず本誌を通じて題名の孝道について大聖釈尊のみ教を拝戴し仏教の立場から孝道の本質は大慈悲であることを述べ、参考に供しながら参究につとめ、各位と共に努力を誓いたいと存じます。皆様もご存じの通り当山は開祖平沼桐江先生ご夫妻の孝心の結晶として出現した霊場であります。

ご母堂信行院様ご在世中篤く三宝を敬い、常に白衣観音象を念持仏として尊崇せられて亡き後の世までの観世音の祭祠を願望せられたことが発願の動起となり、

「母の願いの一つ丈でも達成し慈恩に報いたい」



との尊い道心の発露孝道の実践道場としてすでに三十有余年の長年月経過した今もなお日夜法城完成のために精神努力して下さる菩薩行者であります。

小袖もその孝道観音にお仕えのできる勝縁に巡り合い仏教の根本思想である慈悲心の現成に触れて母子のおもいやりの実体にこそ、仏と衆生の如く衆生は仏を知らずと雖も、仏は衆生を忘れ給ういとまなし母子もまたかくの如く母は赤子を忘ることなしの仏の金言を想起して精進を誓わずにはおられない気持ちです。

この度は何人にも共通して判りやすい問題として父母と慈悲心について考へる資料として仏説父母恩重経をとり上げて申述いたします。

父母が親としての本分を尽す努力とは子が子としてのつとめを果せる道に教え導くことであり、それによって祖先に対する報恩の行持、家門の繁栄、子孫の幸福へと発展の基となります。随つて子を導く親は自らの本分に精進努力をすることが大切であります。

釈尊は親の慈悲心についての心得を五カ条に分けてお示しになっております。

第一条 父母は子に対し至心に愛念す。とありますこのことは親は真心をもつて子供を養育し慈愛を身につけさせることであつて、抱いたり撫でたり丈でなく時に臨んではきびしく誠めたり励ますことが必要なのであります。ここで考えることは親として真剣に子を育てる努力をしているか否かは自ら内省すべき大切なことでもあります。

昔中国に著名な学者で伯樂天と申すご仁がおられ或時鳥巢の道林禪師を訪ねて問法されたときの講話に伯聞う仏法とはどんなものか？

道答え諸悪莫作、修善奉行、自淨其意、是所仏教、とつまり諸の悪を作さず全ての善事はこれを行ひ自らその心を清浄に保つことこれが仏教であると、これを聴いた居士は自分も当代の学者として、自他共に認められると云う慢心が先になつて、そんな子供騙しの話を聴くために来たのでない、と立腹のあまりどなつてしまつた。その時禪師は静かに申され

たのは、なるほど三才の童子云うこと易しと雖も八十の老翁なお行い難し、と誠められて居士は悟りを開かれたとあります。全くその通りであります日常生活の中でも目先の浅知慧から事物の判断を誤り禍を犯しております。

親の育児に於ても我意我見で子に対しても受け入れず効果の無い計りか、逆に反抗心を誘発したり、隔りとなり家庭不和から更に不祥事さえ起きる結果ともなりかねない。日頃は人命の尊重を口にし乍らおもうやりに欠ける計りに人非人となり、現世を地獄とし餓鬼畜生道とし悪循環を繰返して救い難い結果となる事からも、私共は上求菩提下化衆生の願心を信条としておもうやりに徹することこそ、自他の救われる最上唯一の據経と信ずるものであります。以上で第一講を了りとします。次号以下親の慈悲心に対する釈尊の御教示を逐条毎に解説する予定であります。なお文中の誤り不明瞭な点にお気付きの際はご叱正をばお願いいたします。

後の稿で親の慈悲心五条の解説に引続きお伝えす

る仏説父母恩重經とはどの様なお経であるかを簡単にご紹介いたします。この経は中国の唐時代（凡そ一、八〇〇年前）に撰述されたもので当時は印度から盛んに経文の伝った頃で梵文に訳された中に仏説父母難報經、仏説孝子經、心地觀經などの親子の道に関するものがありますそれらのお経文にある教を一段と詳しく説いてあるのがこのお経であります。仏教聖典として世にひろく尊ばれわが国に伝わったのも古いことで正倉院の文書のなかに父母恩重經一卷があると聞いています。以下次号

#### 営業項目

- 一般建築
- 社寺建築
- 美術造形
- 設計施工

## 三信工業株式会社

本社 東京都杉並区永福二―一―十一  
電話 (三三二) 九五五一



# インドネシアの旅

(其の二)

桐江

## バリ島のケチャックダンス

前号の珍しいひなびた、村祭りを印象深く見物した処、近くの寺院で、今度の旅行で、最も見所のケチャックダンス、が始まると云うので見ました。ダンスと云うより、立派な演劇で、ヒンズー寺院のバリ式で立派な門前の広場で行われ、観覧席もありました。

この広場の中央には、ヤシ油の灯明を沢山飾った二米位の高さの円錐形の照明がありまして電灯と異り私達の心は、古代の蕃地のタイムトラベルに吸いこまれたような錯覚をおこしました。

この島にはまだ電灯や、コンクリの家は少なく、家屋、人情、風俗すべて古代そのままです。いつま

でも是非、

この島の美

を破壊され

ぬよう祈る

ものです。

その内、

一つの楽器

は、日本の

はやしで用

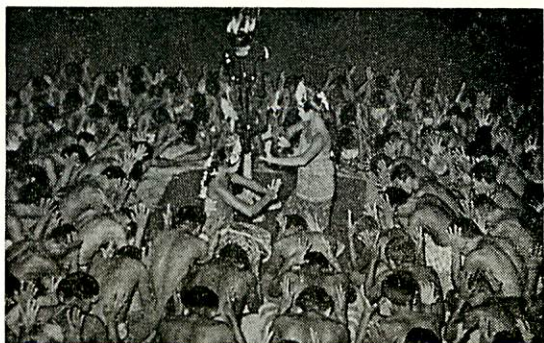
いる鐘の様

な、大小十

数個を円形

に並べてお

りまして、



カンテラの照明を中心に踊る幻想的なケチャックダンス

此の広場の左側には十数種の原始的な楽器が、踊りに合せて妙なるリズムを奏でています

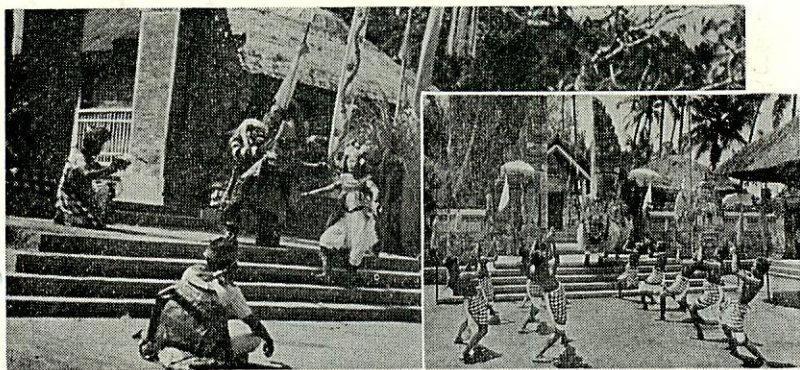
楽人の指の腹は、たこで固くなっているのには驚きました。

已に夕暗迫っている門内の社殿には土人が、ケチャツ ケチャツ ケチャツと声を張り上げて、礼拝しているのが聞こえます。

その内耳に「ハイピカス」の花をはさんだ、半裸体の百数十名の男がケチャツ ケチャツと云いながら門から踊りながら飛び出して来て、広場中央のカンテラの照明台の周りをぐるぐる輪を作って踊り廻り、やがて花びらの様に、三重の円形をつくりカンテラを囲み、ケチャツ ケチャツと云いながら上体で、勇壮なリズムで踊るのも魅力がありました。

その時門内から、妙な面をかぶったり、素顔でおかしなくまどりをした、満艦師の王様や、家来や、悪魔等の踊り子が、代る代る踊りながら中央に来て踊るのですが、その筋書は「美しい女王が、悪魔にくるしめられているのを猿王が助ける」と云う古典芸術の様相がよくわかります。

彼ら芸人は吾々見物人に見せようとする態度はな



### バリダン

く、只、神に捧げると云う熱狂的信仰が現われており、女は本当に涙を流して踊っている情景もあり全く感激してしまいました。

その夜はホテルの屋外食堂で、「レゴダンス」を見ながら、セルフサービ

その食事に熱帯の晚饗を満喫しました。

中には豚の丸焼きの皮だけたべている通人もいて真似しましたが、日本人にはたべられません。

### 象の谷と聖なる泉

王様の遊んだと云う象の谷には、竹造りの家や岩窟があり、妙な神像が並んでおります。庭の池には日本の鯉が沢山いて、私達を見て喜んでいる様でした。そこから自動車で登ると聖なる泉に着きます。



土人娘が案内する  
ヒンズー寺院のそばの宮にて

池の中から清水が、コンコンと湧き出しており、この水を引いて作った大衆風呂には、土人が大勢水浴しています。

その奥にテルタアンブル寺院があります。腰に布を巻かれて拝観料を取られました。美しい土人の娘が、にこにこしながら、親切に案内するので、喜んでいた処、出口の土産物屋につれ込まれて義理で、土産物を買わされ、バリの人もここでは商魂たくましいなと思いました。

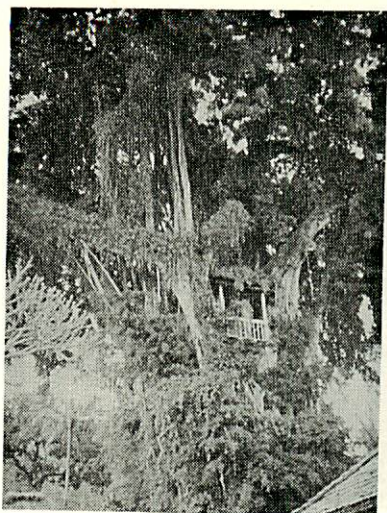


ケヘン寺入口の珍奇な沢山の彫刻

此処は、涼しいと見え、スカルノヤスハルト大統領の別荘が山頂に並んでいます。

### バリ島最古のケヘン寺院

一時間も山に登ると千数百年以上の歴史のあるヒンズー教のケヘン寺がありまして入口で又布を腰に巻かれます。登り段の入口にはヒンズー教の石仏の珍しいのが数十並んであり、これには心が引かれました。段を上って門内に入ると、樹令数千年と思



パーミアンツリーの  
十米位の高い処の鐘楼

われる様なパーミアンツリーの高さ十米位の所の木の又に鐘楼があるのが珍らしく、昔は低かったでし



十一重のヤシ屋根の大塔

ようが今は登るのに大変の様です。  
ヤシの葉でふいた十一重の塔が十数基も並んでいるのが古びていて、心が引かれました。

### キンタマニー火山とバツール湖

ケヘン寺をあとに、またバリ島の中央山頂に登る











朽木みよ子	伊達セキノ	小川多賀子	面末吉	榎島仲子	佐藤コト	田中勝子	大山貴子	土屋博靖	平松和子	大武チヨ	阿部浅次郎	市川	高橋芳次郎	富岡菊枝	由水静枝	大谷英男	川井充子	山名酒喜男	清恵	田みどり	
1	1	1	1	2	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
山名昭光	末永正子	福田薫	池松靖子	佐伯英雄	田村治平	奥泉和夫	大谷春子	奥泉美智代	岡重治	不破作重	誠二	松本久	小川忠二	金よし子	町田玲子	登志子	圭二	陽子			
1	1	1	1	1	5	10	3	3	7	2	1	2	5	1	4	5	1	1	1	1	
吉見静夫	宮内栄子	古都繁次	小松茂子	近藤春義	大高義賢	二宮謙三	宮内昭三	秋田シヅミ	三芳義道	富山修	長安直子	木村亮信	二村常山	木村房子	南波福寿	尾張亮登三	岩崎きみ枝	平野孝昌	萩原恵一	若林とく	
1	1	1	1	5	5	1	1	1	1	1	1	1	2	2	1	1	1	1	1	13	
渡辺義之	裕美	義昌	照義	和恵	齊田鶴	服部みさ	服部康子	西嶋達夫	服部三千代	野見山秋子	真淵辰男	真ツナ	平野秀夫	田村とり	阪口茂雄	広田祐子	梅田イネ	佐藤芳子	梅田のぶ	田中きみ江	神山勝造
9	2	1	3	5	6	4	2	2	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
宮本弘賢	小林五郎	友三郎	渡辺林三郎	花田権三郎	松山せつ	生駒三四子	五十嵐梅	滝沢秀夫	高橋アイ	白井明観	白井佳代	梅沢愛子	小井秀子	小野秀子	藺草とき子	田代今日子	中川文子	山田ふみ	小野せき	荒木テル	小林扶三会
1	1	1	1	1	1	1	1	2	5	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1
中川和夫	青山精一	中宮祥雅	喜久男	滋	中崎スミ子	土佐栄治	中山由喜子	松下日吉	加茂有一	藤長信行	日結敏一	小曾宏至	木下喜一郎	久保田治子	牧野暢太郎	渡辺きょう子	育子	小沢昇	小沢とわ	林宗美	
1	7	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	5	5	1

羽田 清子	〃 修子	岡部 錦子	平沼 とみ	平沼 弥太郎	(名実受付)	松尾 重子	中村 まつ子	〃 美可	見川 照子	〃 万美	浅見 茂治	〃 関子	本橋 義治	岡部 とよ	岡部 貢	小椋 タケ	関根 源太郎	黒沢 弁作	石井 栄	齊藤 シモ	新井 卯市
1	1	10	10	100		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
齊藤 善八	千島 利正	鈴木 成尚	熊平 源藏	北田 伊兵衛	松岡 夕子	並木 成子	新井 盛	山田 盛治	石井 力松	石井 あや子	当麻 保	粕谷 金司	〃 ミヨ	金子 寅吉	小沢 長助	山崎 藤吉	山崎 長平	〃 孝	島崎 正吉	小山 権之丞	中島 広平
1	1	2	1	1	1	1	2	2	1	1	2	1	1	2	2	2	1	1	2	2	2
平田 一雄	細見 フサイ	並木 吉野	大塚 夏子	甲賀 寿男	阿部 せつ子	矢島 重五郎	小林 正八	小林 芳子	柴田 セヨ	小林 英治郎	上野 稔	金沢 敏雄	〃 千代子	平沼 幸一	広瀬 秀雄	後藤 マン	後藤 絹子	藤武 春雄	熊田 克子	加藤 友三	若林 政吉
2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	2	2	2	1	1	2	1	1
若林 英子	加藤 香代子	熊田 直哉	宮田 玉枝	笠原 勇吉	岡部 靖	吉田 タネ	佐藤 進	森 美子	山田 綾子	滝田 トキ	山田 盛康	白井 愛子	齊藤 昌吉	(東京受付)	梅松 富美	和田 千代	〃 恬男	島崎 澄子	佐々木 智佳子	渡辺 あき	〃 美美
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2		1	1	1	1	1	3	1
渡辺 美穂	真田 伝治	西山 キクエ	中川 和夫	岩崎 きみ枝	根生 いち	〃 久子	〃 保	南波 明子	〃 福寿	二村 常吉	荻島 綱子	尾張 亮登	木村 亮信	金子 清	西田 一郎	田坂 多美子	田坂 秀之助	竹内 真知子	吹田 すがゑ	福山 芳一	吹田 清太郎
1	2	1	1	5	1	1	1	2	2	1	2	1	1	1	2	3	1	1	3	1	1
矢野 ひさ	矢野 忠三	〃 せい	中島 竹野	〃 行雄	谷岡 美保子	〃 繁	竹内 尚雄	江田 信子	鹿島 義秋	後藤 慎	〃 満寿子	吹田 光子	〃 善次郎	浅見 倫一郎	岡部 与作	原 旭	鈴木 恵子	三輪 信男	富平 綾子	物 江ミ子	鍵山 芳郎
1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	3	1	2





福田弘	平田修一	竹本英明	菊地敏郎	谷本盛雄	鈴木進吉郎	三輪榮	岡田憲二	下山茂	会川修	奥村利弥	山内三男	門谷満夫	杉田義	東山茂	今西直枝	今西利章	岩崎輝	馬場清美	小沢節子	〃良子	持田三代子
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	3	3	3	2	1	1	1	1	1
高橋春治	山本昇	角野稔一	片田家正	石井克己	光藤元哉	深野茂夫	秋山浩	杉浦俊胤	色紙幸義	菊地敏郎	川合登美男	島仲一	一柳未幸	藤原良司	佐々木文三郎	小貫哲雄	倉沢勇介	星野鏡二	松下武文	石井恒正	西山美広
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
古谷紀久子	井出章子	木本英一	齊藤好美	井上貞一	岡田達雄	中島千之助	水口憲夫	杉田義	池中悦雄	高里良英	橘和尚道	藤村勲	小林巧	服部正見	石関学	佐藤勇一	藤木忠明	門田千秋	大野英明	中村行子	豊田奈佳子
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	1
長谷川喜作	青野松男	小沢源蔵	福島秋子	新井光子	久保ナカ	〃忠和	〃知加子	〃道子	〃定尚	〃千代	柿原雄太郎	清耕雨人	好山水岳人	柿原康治	木村順一	菊池愛子	山幡文雄	増谷武夫	桑原春也	所潮	齊藤達
1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4	1	1	1	1	1	1	1
榎本みや子	平岡くに	北川教全	広瀬秀雄	飯塚孝司	小池清	大野元美	吹田正太郎	塩入花子	松田江畔	日本火災	氏名	紹介者氏名		河原田知子	岡部美澄子	森田摂子	岡部とく	神山磯江	古屋サダ子	長谷川澄子	氏名
26	83	50	50	300	15	200	28	20	110	80	卷数			2	2	2	2	1	1	1	1
伊藤正雄	東海鋼業	多聞酒造KK	平沼浄	武田薬品工業KK	中宮祥雅	山口貴美子	若林とく	塩入花子	東洋ハウジング	吉野ひで	氏名	累計 四、〇四九		合計 一、四〇六		合計		第二集		卷数	
15	10	15	36	28	15	16	70	40	87	13	卷数										

# 寄進者芳名

敬称略

## ○参道 大灯籠

江崎元堂	岡部千三	平沼宏彦	平沼康彦	三信工業株式会社	矢島武久	武州商事(株)社長	桐木光三	大栄不動産(株)社長	若林とく	平岡徳次郎	平岡徳次郎
------	------	------	------	----------	------	-----------	------	------------	------	-------	-------

## ○香

爐

江崎元堂

## ○鰐

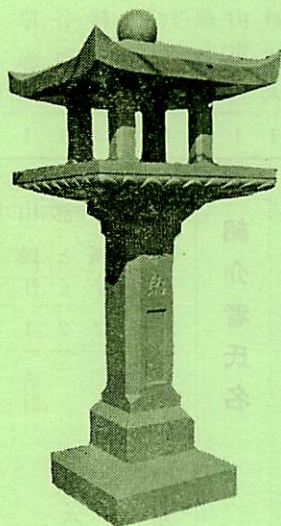
口

鎌倉講中

## 大灯籠寄進の勸進について

白雲山境内に、大灯籠三十数基の建立を計画いたしました処、すでに九基のご寄進がありました。灯籠は純すいの朝鮮式で高さ二・五米で評判が良い様です。

一基は十万円 何卒御協力御願ひ申上ます。







# 写経折本申し込み用紙

取扱者

写経用折本巻数

ご住所

ご芳名

--	--	--	--	--

○写経折本は、納経回向科を含み一巻が金五百円

○お一人で何巻でも写経出来ます。

○お申し込みと同時に、ご納金ねがいたく存じます。

○お申し込先

埼玉県入間郡名栗村 鳥居観音

電話(〇四二九七〇四局)二七五

練馬区小竹町一の一五二 平沼方

電話(九五五)〇四六五

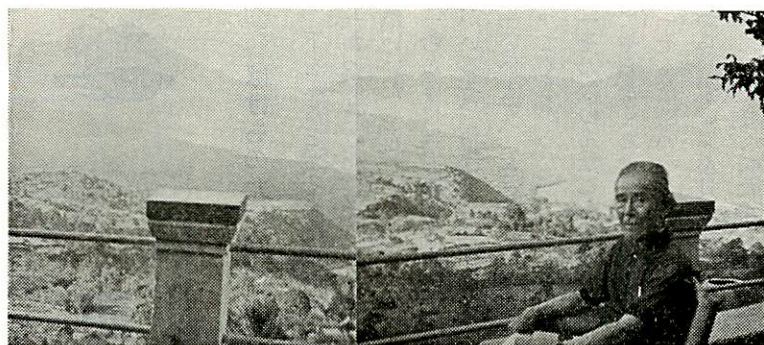
○お払込み先

埼玉銀行名栗支店 鳥居観音納経口座

埼玉銀行練馬支店 鳥居観音納経口座

又は振替用紙にて郵便局振込

(口座) 東京一五五八八五



キンタマニー火山とバツール湖

と、キンタマニー火山と、これをとりまいているバツール火口湖の雄大な景色が眺められます。

この湖畔には死人を岩上におき風葬する特種な人種がいるそうです。

インドネシアには百数十種の原住民がいて、原始的で皆異っています。

この火山は、千数百年の間に

三回も大ばく発したとの事で、溶岩の流れた層が、はっきり時代を物語っているのも面白く仲々絶景です。ここでも観光地らしく、小供の物乞や、土産物のおしうりにはなやまされました。

この夜もホテルの屋上で耳に、ハイピカスの花をはさまれて、音楽や踊をみながら、バイキング料理に熱帯国の気分を味あわれるようにする観光への努力がよくうかがわれました。

十字星を見たいと思いい町に出て、色々の人に聞いても、はっきりせず、赤道直下では時間によって地平線にかくれるためだろうとの事で、残念でした。

### 座礁している日本の輸送船

この海岸に今だに戦争中、日本の輸送船が、座礁したままの姿が見えて、感無量でした。思えば無茶な戦いをしたものです。私達の案内人が、日本の歌を片言ながら自慢げに歌ってきかせましたが、この地で戦死した日本人を追想して、心から冥福を祈りました。



# 西遊記

(其の二二)

岡部千三

## ばけものたいじ

下を見ると、それは広い大海原、

「あつ、そうだ、そうだ、きょうだい」と八戒が突然いいた。

「むこうに波月洞がみえるな、たしかあそこに悟淨がいるぞ、悟淨をさきに助けてくれないか」

「いいとも、だけど、まてよ、海でからだをよく洗ってくるからな」

「そんなのんなこと云ってるなよ、一時も早く助けてやらなくちゃ、かわいそうだよ」

「そんなにいそぐな、わしがすいれん洞へかえってから、ずいぶん日がたった。このからだがよごれていて、くさくてたまらないだよ、だからきれいに

きよめていきたいのだ」

悟空は、海の水でからだをきれいに洗ったので、心もさっぱりして、いよいよ波月洞へ向った。

波月洞の門前で、子どもが二人であそんでいたが悟空は何を思ったのか、いきなり、その子供二人をかかえあげてしまった。この様をみて、おどろいたのは、百花しゅう姫である。

「あなたは、何をするのです、つみもないのに、その二人は、黄ほう郎の子どもですが、わるいことはしていません。早くはなしてください」

そばから八戒が、鼻をつきだして、

「わかっています。少しの間かりるだけです。沙悟淨をここへつれてきてわたししてくれば、子供はぶじにかえしましょう。そうだな、悟空のきょうだ

い」と云った。

「ああ、そうだよ、その通り」

悟空も、こういったので、百花しゅう姫は、沙悟浄のなわをとりて、つれてきた。

「きょうだい、よくきてくれたな、おれはこのまま死んでしまうのかと思って、本当になんかしかたよ」  
沙悟浄は涙をこぼしてよろこんだ。

「この悟空さまが達者なうちはな、みんなを見ごろしなどするものかい。ところで、おまえたちふたりは、すぐさま、宝象国へいってくれ、宮殿の庭へ、この子どもをおとすのだ。そうしたら、黄ほう郎のばけものめが、ぶつたまげてくるにちがいない。それをおびきだして、たいじしようという寸法さ」  
「だって、きょうだいよ、高い空からおとしたら、子ども二人はつぶれちまうぞ」と八戒は、しんぱいでたまらなくなった。

「だいじょうぶ。必ず、おれさまの術で生きかえらせてやる」

「それならいいだろう、よし、やろう」

八戒と悟浄は、子どもをかかえて雲にのせ、宝象国の上へとんでいった。

宝象国の宮殿の庭に、どすーんと、へんな音がしたので、黄ほう郎がでてみると、空からおちてきたものが庭にころがっている。よくみると、自分の子どもであった。

「うーむ……ひどいことをしたものだ、何者のしわざだ」

きつと、空を見あげると、雲の上で、八戒と悟浄がげらげらわらっていた。

「よし、八戒と悟浄のしわざだな、悟浄のやつ、うごけないようにしておいたのに、どうしてここへこられたのだろう」と黄ほう郎は、大いそぎで波月洞へとんでかえした。

波月洞では、悟空が、百花しゅう姫をかくして、自分が姫にばけて、泣いていた。

「もうしわけありません。八戒に子どもをさらわれてしまいました。わたしは、あまり泣いたので、ここがいたくてたまりません」と、くるしそうに胸を

おさえて云った。

「心配するな、これでもできればすぐなおる」

黄ほう郎は、にわたりのたまご位もあろうと思われる。大きな仙丹をとりだして、

「だがな、これを指ではじいてはだめだよ、わしのまほの力がなくなってしまうからな」

と云いながら、悟空のばけた百花しゅう姫に、わたした。

「はい、はい」

百花しゅう姫にばけていた悟空は、仙丹を指ではじいて、ひとくちにのんでしまった。

「やっなにをする」と、黄ほう郎は、あわてて手を出したが、もう間にあわない。

まほうがとけて、りっぱな若者のすがたは消えて、みにくいまものになった。悟空も、からだをひとゆすりして、ほんもののすがたになった。

「おどろいたか、黄ほう郎、齊天大聖孫悟空さまがおししようさまをおたすけしにまいったのだ、こうさんすれば、いのちだけはたすけてやるが、どうだ」

如意棒をとりだして、ぶーんぶーんと、二三度ぶり大声でどなりつけた。

「こうさんなどするものか、力づくでいこう、さるこい」

黄ほう郎も、大声でどなりたてた。それが合図になって、あちこちから、大勢のまものどもがおどりで、悟空をとりかこんで、一斉にうちかかっていた。

「おお、でたな、ばけものめ、大勢のほうが、はり合いがあるぞ、それっ、いくぞ」

如意棒をふりまわす悟空のすがたの早いこと、右に左に、前にうしろにととびまわり、たちまちにして、大勢を一人のこらずうちたおしてしまった。

これを見た、黄ほう郎、空中にとびあがると、すがたをぱっとけしてしまった。

「おしいところで、にげられた。それにしても、ふしぎなやつ、正体をしらべてやるう」

悟空は、天上へあがって、玉帝に、くわしくわけを話した。

「そう云えば、けいもくろうと云うものがいなくなつてから、丁度十三日目になる。天上の一日は地上の一年に当るから、十三年前に黄ほう郎が姫をさらつたと云うお前の話とすっかりあう。

お前のたずねる黄ほう郎とは、けいもくろうにちがいない。だが、天上にはもどらないところをみると、下界のどこかにかくれているだろう」と云つて玉帝はじゅもんをとなえた。

黄ほう郎は、悟空にうちまかされて、谷川にかくれていたが、玉帝のじゅもんをきくと、しかたなくすがたを現わして、天上へのぼつた。それで悟空は一安心した。

「いろいろお世話になりました。おししょうさまをおたすけにまいます。ごめんください」

悟空は、玉帝にわかれて、又波月洞にもどり、百花しゅう姫をつれて、宝象国へいった。

「おお、むすめ。よくかえつた」

宝象国の王は、百花しゅう姫の手をとつて、うれしなみだをこぼした。悟空は、黄ほう郎のことを話

し、法師が黄ほう郎のために、とらにされていることも、話したうえ、

「それで、おししょうさまはどちらにおいでですか」とたずねた。

「そうとは知らず、黄ほう郎にだまされ、法師さまをとらのばけものだと思ひこみ、とんだ失礼をいたしました。法師さまは、あれにおいでです」  
国王の指さした方を見ると、鉄のおりの中に、一匹の大とらが、こちらを見ている。

「おししょうさま、なさけないおすがたに……」

悟空は、口に水をふくんで、ぷつと、大とらにふきかけると、大とらは三蔵法師のすがたにかえり、悟空にむかつて云つた。

「よくきてくれたね、おかげで経文をとりに行ける悟空、ありがとうよ」

「いつてらっしゃい。わたしはここから花果山へもどります。ごきげんよ」

「これこれ、悟空、お前も一緒に行つてくれるのはなかつたか」

(以下次号)



## 田舎医者(其の七)

見川 鯛山

挿絵 おおば比呂司

### かんぶら芋

春はねむい。そして今日も朝からずっと暇である。たった一人、寺の羊カン坊主が、来るにはきたがそれも病人ではない。

村の荒れ寺に、たった一人きりで住んでいる彼は坊主のくせに鮒つりが大好きで、朝早く人目をぬすんで、コソコソと池へ出かけていく。大抵は一匹もつれないのだが、たまには彼に引導を渡される奴もある。その帰りに、きまって私のところへよる。

「俺くらいの高僧になると魚も先方から、よってくるだな。成仏したい心は人も魚も同じだ。けなげなものだわな」

とミミズの臭い手を合わせ一応は拝む。

寺へ帰ると、羊カンは肌ぬぎになり、七輪をバタバタあおいで鮒をやく、狐色にやけた熱い魚を、彼はシューンと醬油にひたし、ひげだらけの大きな口でムシャムシャと食う。だから、口がいつも猫みたいに臭いのだ。

魚の話が終ると、羊カンが云った。

「見たところ、おめえも暇そうだがたまには病人も来るんだべ？ そしたら俺んとこさも、一人位まわしてよこせ、ここんとこ、しばらく葬式をやってねえ」

と、ふらちな坊主だ、こんなけしからぬ男と、ヒソヒソ話をしているから、私はいよいよ怪しまれて暇になる。真つびるまには、仲よしでもあまりあわない方がよいのだ。



羊カンは竿をかついで、とぼとぼと帰っていった。そして、そのあともやっぱり暇である。

私は新聞をもって、便所へはいった。

ふと、誰かが近づいてきた。表を歩くと、その足音がひびいて、またがって座っている私の体へドタドタと伝わってくるのだ。

このたった九坪の、掘ったて小屋の診療所は、足音でも、地震計のように敏感だが、その反対に玄関の戸は、にぶい、一寸やそつとでは開かない。

ガラス戸をガタガタさせながら、その人は執念深かった。これもたぶん薬屋の集金人が、消防団の寄附もらいかのどちらかで、患者さんではないようだ

——蕪でもくらえだ——

場所がらそう怒鳴りたいとこだが、私はそんなことは云はないで、黙ったまま……留守のふりをしていた。……。読みかけた新聞も、下腹の具合の方もまだまだ半分もすんでいないのだ。

「誰アれも居ねえだべかな？」

男が独り言を云った。そのしゃべりかたは集金人

ではない。

「だべかな」が、私の心情をよくした。

「誰だね？」

私が声をかけると、

「先生さん居ただね。俺だ、俺、狸塚の阿久津だ、と、男が大声で云った。

狸塚は、ここから二里も遠い部落で、名前は全部阿久津である。私はこの、遠来のジェット機を迎えるべく、臭い指令室から誘導することにした。

「その戸には鍵なんかかってないんだ。だけど開けるのにコツがある、左の端を持ちあげながら、よいしょと開けるんだ」

やつと、戸が開いて、狸塚がとびこんできた。

玄間は半坪の土間で、私のごごんでる便所はすぐその鼻っ先にある。

「ここだ!!」

中から私がベニヤ板の壁をコツコツたたいてやると、狸が気の効いたあいさつをした。

「暗室かね？」

「うん、あんまり明るい所じゃないな。で、阿久津の誰さんだいあんたは？」

「俺、留さんだ。寒いころ、婆っばが世話んなったよ！」

「ああ、あの留さんか、あんた、頭半分禿げてねえ一方の留さんだったな、たしか」

「んだ、俺禿げてる方の留さんだ、禿げてねえ方の留さんは、俺家の一軒おいて隣んちだわな」

彼はしゃべりながら、玄間の土間へ、なにかゴロゴロと転がしてようだった。

「あんた、そこで何をゴロゴロやってるだ？石臼でもひいてるみたいだ」

私ができくと、留さんがあわてて云った。

「いや、何んてことねえだ。何んでもねえだよ、先生さん……」

「ほう、それで、今日はいったい何の用事かね、婆っばは、まだ達者なんか？」

「ん、まだ生きてるだ。でも半分ぐれえは、死んでるみてえだ。この頃ア、飲みも食いもしねえだ。葬

式の支度もあるしよ、いつ頃になっか、教わっぺと思つてよ！」

「なるほど、でもなかなかむずかしいな、人間、九十近くなると、猫みたいに化けるからな、今日にもコロッとゆくかも知れんし、案外もち直して、ピンピンしまつかもしれん」

「だべか、ほんとに？」

「ほんとだともさ」

私が云つたら留さんが、すっかり考えこんでしまつたようだ。とつくに五十を越えたひげ面の留さんが、半分禿げた頭を両手でかかえながら、困りきつて棒のように突つ立っているのが、私には目に見えるようだった。

留さんが出ていったのだ。困りごとのあるためらつた足音が遠ざかっていく。

私は尻を心もち持ち上げながら、大声で留さんに云つた。

「心配すつことないぞ!! どっちみち永持ちしないんだ。どんなにもつたつてこの月いっぱいだよ!!」

彼の足音は停っていた。きき耳を立てていたらしい。再び、バタバタと留さんが馳けもどつて、せつかに戸を開けた。だが、戸はもう開かないのだ。諦めて戸の外から彼が怒鳴った。

「やっぱりそうだべ？ 俺ァも、そうだべと思つていただ。やっぱりな!!」

帰りがけに、留さんがまた云った。

「俺、その土間さ、一寸ばかし芋おいてきた。美味え芋だぞ、母ちゃんと食つてくれ」

読み終えた新聞をち切つて用をたし、ズボンをはきながら外へ出ると、そこに狸塚から背負つてきた、掘りたてのかんぶら芋が、沢山こるがっていた。私はあの、不景気な坊主の羊カンに、この葬式のいい話をこつそり教えたたくてムズムズしている。

## さ み だ れ

五月の雨が、しつとりと高原をぬらし、新緑がいつせいに始まると、黒ずんだ針葉樹の間で、毛羽のように軽やかな淡く幼い葉っぱが、かすかな風にゆ

れる。

霧が乳色にけぶりながら、柔らかに森を包み、そこから黒ツグミとオオルリが鳴く。

今朝、私は初もののワラビを食べた。

雨の日は病人が来ない。診察室の机に頬杖をついてびしょ濡れの庭を見ていると、その庭をガバガバと雨合羽の音をたてて駐在の茶晶巡査がやってきた「むし暑いな」

汗の顔をゲンコツで拭きながら彼が云った。

「そんなもの着てるからだ。傘さして歩けばいいんだ」

「ばかやろ、警察官が傘さして歩けっか!!」

彼は誰にでもばかやろうと云う。

「おれ、おめえこと呼びにきたんだ。どうせ暇なんだべ？ おれと一緒にきてくれや」

「一緒に？ だってあんた、私は何も悪いことしてないぞ」

「ばか、往診だ、共産党の児玉龍が苦しがつてるんだ。だいで、ひどそうだぞ」

以下次号

## 鳥居観音だより

### 春の行事と来山状況

○節分会 二月三日、午後三時法要の後、鬼は外、福は内と唱えながら豆を撒いて、参拝者には福豆の袋入りをお分けしました。

○春の彼岸法要、三月十九日、午後一時、彼岸法要に合せて地元念仏講の方に子供も交えて、堂の中央で、大きな珠頭をたぐりながら念仏を唱えられました。

浅春の気配がただよって、たのしい一時でした。

○役員会、三月二十七日 午前十一時、本堂で法要後、役員会開催、出席者十八名

開会に先だち、開祖平沼先生より「鳥居観音開山以来已に三十三年の歴史を経てようやく充実して参りましたのでこの際鳥居観音の発展をお願いいたしたい」とのあいさつがあり、次の通り議案が裁決さ

れました。

一、寺院規則改正案 原案通り可決しました  
二、護持会規則改正案 原案通り可決しました  
三、役員改正の件

(1) 責任役員 五名 左の通り決定致しました

桐木光三 平岡くに 町田真之亮 有馬忠直

岡部千三

(2) 護持役員 十二名 左の通り決定致しました

飯塚孝司 会津政雄 梶谷真一 新妻次郎

井上竹吉 齊藤新作 小峰久治 若林とく

町田仲太郎 吉田仙太郎 小林高安 枝久保

鶴四郎

(3) 監事 二名 左の通り決定致しました

武井藤吉 平沼幸一

(4) 新役員の推薦により左の通り決定致しました

代表役員 桐木光三

護持役員会長 飯塚孝司

四、四十七年度決算 原案通り可決

五、昭和四十八年度事業計画 原案通り可決



今回の役員会に於て代表役員に桐木光三氏は、誠に力強く感ずる次第であります。就ては役員皆様には今後共 鳥居観音を育成下さる様期待して止みません。

○春の例大祭 四月十七日 十時

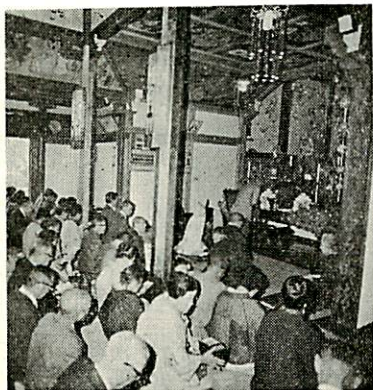
参 拜 の 人 々 入 口 に て

全山の三  
ツ葉つ  
じが今日  
を待ちか  
まえてい  
たかのよ  
うに、咲  
き盛って  
参拝の方  
々の目を  
よろこば  
せました  
法要は予



三蔵塔前で献香の人々

越、青梅  
浦和、川  
京、川口  
鎌倉、東  
はるばる  
きました  
でいただ  
たのしん  
さって、  
を採勝な  
由に山内  
ただき自  
とってい  
で中食を  
山の小屋  
は終了し  
十二時に  
められ、  
定通り進



本 堂 内 の 法 要

定通り進  
められ、  
十二時に  
は終了し  
山の小屋  
で中食を  
とってい  
ただき自  
由に山内  
を採勝な  
さって、  
たのしん  
でいただ  
きました  
はるばる  
鎌倉、東  
京、川口  
浦和、川  
越、青梅

秩父等各方面からのご参列の方々と、地元役員及び梅花流のご詠歌奉詠の方達で、盛大に執行いたすことができました。

○つつじまつり 四月十八日より二十四日迄

春季例祭はまさにつつじから、そして翌日からつつじ祭りの幕が開かれました。主な来山は左の通りです。

○十九日 杉並診療所湯浅所長の主催による八十名来山

○九月二十二日 コロナ会三百名来山

○同日毛呂病院のあしべ同人と名栗の有志二十五名吟行句会を庫裡で開催、多数の玉句中から左の句を抽出掲載

観音は山頂に白し河鹿笛 秀嶺  
翠巒すゐらんに白き春置く三蔵塔 螢石

木の芽坂老の歩調に合せけり 一昭

汲みあげし水に春貌覗きおり 昭二

峡深く家あればある八重桜 螢石

観音の慈光春陽に笑み給う 新月

観音の眼を落し給う谷若葉 三喜

梵鐘の木霊うけとめ春の溪 鳩山

○二十六日 鳥居観音練馬講結成参拝のため八十名来山、講旗に入魂式を本堂にて挙行

○二十九日 今日からゴールデンウィークが始まり家族の行楽が、車をつらねて来山、よろこばれる。

○五月八日 花祭り 雨天 東京からお茶の会の先生方が三十七名来山

○九日 大野元美先生外有志二十名来山、本堂にて写経二百部奉納式挙行 同日 畑知事外八名来山

○同日 浦和商业高校二年生三百名来山

○十日 川越幼稚園児の一団お母様と来山

○十一日 東京福徴講元、新妻次郎先生ご一行来山

○十四日 練馬小竹町老人会三十名来山

○二十七日 松田江畔先生ご一行来山 書道会開催

とりゐ 第二十七号 発行日 昭和四十八年七月一日  
編集兼 埼玉県入間郡名栗村 鳥居観音 岡部 千三  
発行人 浦和市仲町二八―十五 武州印刷株式会社  
印刷所 鳥居観音電話〇四二九七〇四、名栗二七五番  
発行所

# 白雲山

鳥居観音  
観世音センター案内図



## 施 餓 鬼 の 行 事

- 7月16日午後2時
- 塔婆は大観音近くに万霊塔を建て、そこにまとめて奉安しますが、お持ち帰りもできます。
- 供養料 大塔婆1本 1,000円
- 申込及期日 7月10日までに鳥居観音事務局へ  
埼玉県入間郡名栗村 電話 名栗 04299 (704) 275番

## 流 燈 法 要

- 8月16日 午後5時法要 6時半 流灯
- 法要料 1燈 700円 お一人で何灯でも可
- 趣 意 先祖代々又は戒名各霊位
- 申込及期日 8月10日までに鳥居観音事務局へ

## 花火大会と盆踊り大会

- 流燈が終ると数百本の仕掛打上げが山にこだまし、これに合わせて、盆踊り大会がくりひろげられます。

## 秋 の 彼 岸 法 要

- 彼岸中

## 祈 禱 の 執 行

- 常時祈禱申込を受け執行します。
- 祈禱料 1,000円 2,000円 3,000円以上

## 写経塔落慶と心経一万巻納経式

- 10月30日執行の予定